

研究発表もうしこみフォーム

氏 名：永良

氏名のローマ字表記：YONGLIANG

所 属：神戸大学国際文化学研究科

専 門 分 野：歴史

発表のタイトル：

清代道光年間のモンゴルにおけるラマ旗の行政権継承問題の一例-フレイ旗における頭等ラマの交代問題-

発表要旨 (600字～800字程度)：

モンゴルでは16世紀頃からチベット仏教のゲルグ派が盛んに信仰され、清代モンゴルの行政組織の中でもチベット仏教の活仏が旗長、盟長等に相当する職に任命されることがあった。そういう活仏が治める領地を俗称として一般にラマ旗と呼ぶ。本発表で扱うシレートゥ・フレイ旗は清代のモンゴルに設立された最初のラマ旗であり、清朝皇帝が該当旗の仏教僧たちを介して最初にチベット仏教を受け入れたという歴史的事情もあって、清朝入関(1644年)前からチベット仏教人材育成の源泉として重要な役割を果たした。

清代のシレートゥ・フレイ旗では、ジャサク・ダー・ラマ(扎薩克大喇嘛)が当該旗の長であり、その下に4人のジャサク・ラマ(扎薩克喇嘛)、4人のデムチ(徳木齊)、4人のゲスグイ(格斯貴)と呼ばれる役職者がいた。歴代ジャサク・ダー・ラマの人材供給源は青海アムド地方東部のウシタク寺とパージョ寺であり、そこから転生者を選んで任命されていたことが若松寛氏らによって既に解明されている。

清代モンゴルの仏教史に関する従来の研究は、清朝政府のチベット仏教に対する統治理念の研究が中心であり、活仏の領地に関する実態研究はほとんどない。そこで発表者は、本発表で内蒙古自治区档案馆所蔵の一次史料「シレートゥ・フレイのジャサク・ロブサンチョンボイルから、旗の頭等ラマ・ジムバチョムチョグジャラサンが逃亡したことを報告した一件」を使って、シレートゥ・フレイの頭等ラマの継承問題の実態を検討したい。

清代の道光21(1841)年5月にシレートゥ・フレイ旗の頭等ラマ・ジムバチョムチョグジャラサンが「近年、常に身体の調子が悪く、多くの医者たちに見てもらったが、なかなか治らないので、地元(青海のラソシニン)に帰って病気を治したい」と言って理藩院に休暇の願いを出し、理藩院はそれを許可した。しかし、実際には青海には帰郷せず、理藩院にもその旨を報告した。一方、同年10月に「頭等ラマ・ジムバチョムチョグジャラサンが逃亡した」と言って当該旗のジャサク・ラマ・ロブサンチョンボイルが盟長に公文書を送った。その後の史料を確認すると、当該旗のジャサク・ロブサンチョンボイルが代理人のような形で頭等ラマの印鑑を使用するようになった後、頭等ラマ・ジムバチョムチョグジャラサンの病気が治ってフレイ旗に居るにも関わらず、まだ治っていないと言う偽りの文書を理藩院に送った。しかも頭等ラマ・ジムバチョムチョグジャラサンをフレイ旗から他の場所へ移動できないように軟禁したようである。頭等ラマ・ジムバチョムチョグジャラサ

ンが仕方なく旗から秘かに脱出して盟長にこの件を報告したため、盟長は官員を派遣してこの事情を調べ、理藩院に報告したのであった。

史料によると、頭等ラマ・ジムバチョムチョグジャラサンは、ジャサク・ロブサンチョンボイルによって殺されてしまうことを恐れて、シャビらと一緒に脱出したようである。この事件に対して最終的には理藩院、盟長、三塔寺衙門が共同で解決に当たり、兵部もしばしば官員を送って協力していた。結局、ジャサク・ロブサンチョンボイルらが捕えられたことを明らかにできたが、その後の詳細な処置はなお不明である。今後の課題としたい。